

新・下野市風土記

下野国（栃木県）のお国柄



下野市教育委員会 文化財課

11月の天平の芋煮会のとき、ある方と栃木県の県民性の話になりました。この頃、ニュースで栃木県の交通マナーの悪さが取り上げられていました。そこから県民性の話題になりました。古代においては県民性ではなく「お国柄」といったほうが良いのでしょうか。

奈良時代初期の和銅6（713）年に中央政府の命令で各国ごとに編纂された「風土記」が下野国でも残っていれば、天平時代の様子を知る手掛かりとなったことでしょう。現存するのはお隣の常陸、出雲、播磨、豊後、肥前の5か国で、『出雲国風土記』のみが完本です。

全国的に『風土記』が残っているのは少数ですが近年、古代の人口についていくつかの説が述べられています。いわゆる「戸籍」「計帳」による税や兵役の賦課のための根底資料を目的としたデータを再計算した結果として、これまで20万人といわれてきた平城京の人口は10万

人以下という説、ここから逆算した古墳時代後期頃の大和王権が統治した範囲の人口が400万人程度（奈良時代が500～600万人）と推測されています。

鎌倉期以降は、各地域の人口は非常に分りにくくなります。本来、人口は時代とともに増加していると考えられますが、全国的に自然災害や気象・天候の影響からか、それほど増えていないのか、薬師寺城、児山城、箕輪城などの城館は造られていても、集落の痕跡はあまりみつかっていません。もしかすると現代の私たちの集住区域と重なっているとも考えられます。下野国内の南半分は宇都宮氏・小山氏・足利氏（藤姓・源姓）などの豪族、結城氏のほか下館周辺や久下田周辺に勢力をもち「結城四天王」と呼ばれた水谷正村（蟠龍斎）などが勢力を伸ばす地域で、常に緊張関係のある土地柄でした。1379～80年の宇都宮基綱と小山義政の熾烈な

争いで有名な茂原の合戦なども起きます。基綱は敗北し一族300余名が戦死。この戦死者の刀の鞘を集めて弔ったのが、上三川町にある鞘堂地蔵と言われていています。県央から県南地域は鎌倉期以降明治期まで、ずっと取ったり取られたりした地域だったのかもしれませんが。

戦国期には、古河公方、西から上杉、南から後北条氏などが、下野国域に圧力をかけてきます。宇都宮氏・小山氏・那須氏などは常陸の佐竹氏と連携してこれらの圧力に抗います。

秀吉の小田原征伐、関ヶ原の戦い以降、関東の勢力構図は大きく変わります。下野国の中心地である宇都宮藩には、徳川氏と関係の深い奥平氏や本多・松平・阿部氏が配置されます。

このように下野国の中心部には譜代大名、東北部には外様大名、北西部には寺社（主に日光山領）、南部には天領・旗本領が点在しました。これらの間の狭小な土地に他国の大名の領地「飛び地」が点在していたのです。

皆川藩（栃木市域）、真岡藩、大田原藩、黒羽藩、喜連川藩、などは別のくくりとなります。

下野市域は天領のほか、現在の秋田県の佐竹藩（国替え前は常陸を本拠としていました）、壬生藩（外様の日根野氏・阿部氏・三浦氏・松平氏・加藤氏（若年寄を務めた譜代大名）・鳥居氏など）、幕末に老中を務めた堀田氏（千葉県佐倉市）などの支配の影響を受けた地域となります。

このように譜代大名など幕府の要職に就く大名（大大名にはならない程度的大名）は、幕府の中間職として異動のたびにその権限・発言力が変わります。天領の間に譜代や外様大名の領地が点在し、下手をすると直接幕府に情報が筒抜けになってしまうため、表面上は周囲に気配りをしながら穏便に、でも何を考えているのかわからないと言われるようなお国柄が染みついたのかもしれませんが。



鞘堂地蔵